

## シンポジウム

### 看護提供方式の変革と創出の取り組み事例から 自組織の看護提供方式を再考する ～安全で質の高い看護実践の伝承を目指して～

コーディネーター 江藤 真由美 (石川県立中央病院 看護部長)  
中田 智美 (石川県立中央病院 看護副部長)

看護提供方式とは、「入院病床を持つ医療施設において、複数の看護職により24時間切れ目なく患者をケアするために編成された看護単位の組織化の仕組み」<sup>1)</sup>である。これまで、看護提供方式の目的は、患者ケアに主眼が置かれていたが、近年は部署の教育や業務効率化の方策として新たな看護提供方式が創出されるようになった。

看護提供方式の歴史を概観すると、2006年の診療報酬改訂により「7対1看護体制」が新設されたことを契機に、新人看護職員のOJTの拡充を目的とした新たな看護提供方式が次々と誕生した。

2009年に「Partnership Nursing System (以下PNS<sup>®</sup>と略す)」、2012年に「固定チームナーシングDPNS (デイパートナー方式)」、2013年には「セル看護提供方式<sup>®</sup>」が創出された。現在は、まさに看護提供方式の変革期である。

シンポジウムを企画するにあたり、まず、県内における「看護提供方式の実態調査」を行い、石川県立総合看護専門学校 教務主任 金田 明子先生より、調査結果を報告していただいた。回答が得られた31施設中、固定チームナーシングが14施設、セル看護提供方式<sup>®</sup>は7施設、PNS<sup>®</sup>は4施設であった。

また、「5年以内の看護提供方式の変更の有無」の問いについては、あったと答えたのは9施設。そのうち5施設(55.6%)がセル看護提供方式<sup>®</sup>への変更であった。セル看護提供方式<sup>®</sup>に変更した理由は動線や記録、配置の無駄を削減する目的であった。一方、業務分担の難しさも課題に挙がっていた。

そして、県内の動向を踏まえたうえで、以下3名のシンポジストから自施設の看護提供方式の見直し・導入の経緯や意図、看護実践の取り組みと

成果を発表していただいた。

1. 金沢医科大学病院 看護師長 大河 正美先生は「固定チームナーシングDPNSは、やりたいう看護をチームが支えて実践する、看護師が同じ方向を向いて看護実践することで、より質の高い看護を提供できる」と述べられた。

2. 福井大学医学部附属病院 副看護部長 野田 恵先生は「PNS<sup>®</sup>は、経験知(暗黙知)の伝承の場であり、日々の看護実践が教育そのもので、質の高い看護の提供につながる」と述べられた。

3. 国民健康保険 小松市民病院 看護部長 湯野 智香子先生は「セル看護提供方式<sup>®</sup>は、ブロック単位で指導や助言が交わされ、経験や知識の伝承にも有効である」と述べられた。

3名のシンポジストの発表から得た看護提供方式に関する多くの実践知は、私たちが自組織の看護提供方式を再考するための刺激となり、明日から取り組む糧になったと考える。

また、シンポジストの発表後に1. 管理者の役割や時間管理について、2. マインドの醸成についての質疑応答が行われた。シンポジウムでは多くの参加があり熱心な意見が交わされたことから、看護提供方式に対する関心の高さを実感した。

最後に、参加いただきました皆様に感謝申し上げます。参加された方々が、シンポジウムを機会としてとらえ、自組織が選択している看護提供方式を再考し、それぞれの施設で、安全で質の高い看護実践の伝承を目指していただくことを祈念します。

#### 文 献

- 1) 一般社団法人日本看護管理学会 学術活動推進委員会編, 看護管理用語集(第3版), 一般社団法人日本看護管理学会, 東京